

「大腸内視鏡治療」

工藤 進英 著

新潟大学医学部教授・第1病理学講座

渡 辺 英 伸

「大腸内視鏡治療」の書評原稿の執筆依頼を受けて少し時間がたつ。本書著者工藤進英氏と出版元の担当者の顔を見るたびに執筆の遅延を心で詫びながら、困難さを感じてきた。それは一病理医である筆者が「治療」という臨床医学第一線の仕事の集約点である本書を評価するという、一種の違和を感じていたからである。病理医の立場から独自の書評を執筆せよということであろうが、そして著者工藤氏と筆者の関係から担当者が私を指名したのであるが、逡巡せざるを得なかったのである。しかしいったん引き受けた仕事である以上お断りするわけにはいかない。

氏は大腸 sm 癌と大腸 IIc の報告を「胃と腸」誌で精力的に行った後、1993 年に「早期大腸癌—平坦・陥凹型へのアプローチ」(医学書院)とその英文版「Early Colorectal Cancer—Detection of Depressed Type of Colorectal Carcinoma」(Igaku-Shoin)を世に問うて以来、わが国だけではなく世界においても早期大腸癌をめぐる認識を大きく一変させた代表的人物である。1980 年代中葉の“幻の癌”IIc の相次ぐ発見と臨床上の定着は、われわれ消化器病理医の間にある種の混乱と激しい論争を巻き起こすことになった。評者は長らく WHO の消化管腫瘍組織分類の委員長・委員を務めてきたが、細胞異型・構造異型度や浸潤の定義と判定法などをめぐり、欧米の病理医たちとの差を常に感じつつきており、国際的なレベルでも論争をはって来た。とりわけ、大腸については粘膜下層に浸潤して初めて癌と認定するという、それこそ腫瘍学の本質、

科学の本質からは程遠い欧米の病理学者との論争に明け暮れてきた感がある。近年ようやく欧米の病理医も消化管腫瘍の組織学的分類の王道に立ち戻って(と念じたい)、日本の主張も一部取り入れるかたちで、国際的合意形成が Vienna Classification や IRAC での会議などを経て進みつつある(まだまだ道のりは遠い)。そのような一病理医としてみた場合、本書の著者工藤氏の豊富な早期大腸癌の症例提示は腫瘍病理学に対する貢献という意味でも計り知れないものである。まさに俊才、俊英と言うべきであろうか。

本書では、発育進展をベースにした大腸腫瘍の肉眼形態分類の提唱(かつて丸山は“肉眼形態分類試案”とすべきと記述したことがあるが、これはさておき)、今や早期大腸腫瘍の診断に不可欠となった pit pattern 診断の際の分類法が提示され、1990 年代に発展させた氏の新しい境地とも言うべき結果が本書に示されている。評者自身には一部異論はあるものの LST の整理もなされている。そして、これらの新しい診断体系を踏まえた粘膜切除術を中心とする内視鏡治療の基本と具体的手技が示されている。手技自体は工藤らの先駆的な臨床開発も含めて既に以前から施行されている。したがって特に目新しいものではないにしても、巨大病変に対する piecemeal polypectomy の手法は臨床医にとって大いに参考になるものだろう。若干ここで注文を述べておくことも無駄ではあるまい。それは工藤らの努力で普及した拡大内視鏡検査による pit pattern 診断である。その分類は

臨床家の間で現在進行形的に議論がなされている。大いなる議論を歓迎したい。他方、本書では“生検不要論”(記載の限りでは合理的ではあるが)から、ややもすれば拡大内視鏡万能論に行きかねない印象を与える表現も一部みられる。一病理医として望むことは、その議論の中で、“臨床所見と肉眼・組織病理所見との対比の中でものを見る”、“総合的診断”という観点をもっと重視してほしいことである。しかしこれらとても、全体として著者が主張する“New Diagnosis and New Treatment”への意気込みと本書の内容の高い価値をいささかも損なってははいない。本書は刺激に富む良書である。

このように、「大腸内視鏡治療」とタイトルは付されているものの、1993 年に上梓した「早期大腸癌—平坦・陥凹型へのアプローチ」と 1997 年に出版した「大腸内視鏡挿入法」をより発展させる形で構成されていることに大きな特徴がある。まさにこの 20 年間にわたる発展の総括的文書とも言うべきものであろうか。臨床・病理を問わず大腸に関わるすべての方々にとって必携の一書である。たびたび挙げる最初の名著の序文で、“形態学に眼を開かせて戴きさらに病理に関して御指導”という賛辞を評者は賜った。若き日の新潟大学時代の工藤氏を思い起こしつつ筆を擱く。

● B5 頁 180 図 28 写真 4
カラー写真 147 色図 6 表 22
2000 定価(本体 15,000 円 + 税)
送料実費

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)